

熏風

教育委員会だより

第四号

平成二十九年十一月十五日(水)

河内長野市教育委員会

「つながり」と「よき大人像」 ～教員として大切にしたいもの～

あるクラスの授業を見た。その教室では、社会の授業が行われていた。私も少しかかわったことのあるAさんが、クラスメイトと一緒に学習していた。

Aさんは、授業とは全く関係のない言葉であるが、その時にどうしてもその言葉を言いたかったのであろう、「〇〇、〇〇。」と同じ言葉を繰り返し、B先生やクラスメイトに伝えていた。B先生が他の生徒に質問している時も、Aさんはその言葉を続けていた。

すると、B先生は、Aさんの言葉を無視せずしっかりと捉え、微笑みながらも毅然と「Aさん、〇〇って言いたいのはわかった、でも今は違う、後でな!」と伝え、またすぐに、授業を続けた。Aさんは納得したのか、笑っており、クラスメイトもB先生とAさんのやりとりを楽しみつつ、社会の授業が続いた。

つい先日、教育長と学校訪問をした時のある教室の風景である。B先生は、日ごろから、すごく子どもと話をする。「聞く」ではなく、「聴く」を実践している。子どもと寄り添いかかわる中で、子どもたちの生活の背景や一人ひとりの躰き、しんどさなどを把握している。そして、それらの背景を掴んだ上で、自身の社会科授業を展開していく。

子どもたちは、B先生の授業において、互いに違った生活背景の中で生まれてくる“価値観の違い”を出し合うことで学びを深めていく。例えば、消費税のことを学ぶ時、相対的貧困の状況に置かれている子が自分の生活を語る。もちろん、先生と周りの子らが「受け止めてくれる」という安心感があるから語れるのである。その子に対し、周りの子が、茶化すことなく共感し、自分の生活との違いを語り始める。互いの生活背景からくる価値観の違いを認め合うことにより社会科の学びを深めているのである。そして、子どもたちはつながる。

「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」には「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」という文言があるが、道徳的価値のみにとどまることなく、人権教育の観点にも立ちながら考えていくことも必要であり、B先生は、意識はしていないかもしれないが、社会科の例えば民主政治の内容を、子どもたちの生活と結び付けながら、生きた授業を展開しているのである。

これらを一言で表すならば、私たちの先輩が大切にしてきた「互いの違いを認め合える集団づくり」を進める中で社会科の学びを深めているのである。

また、B先生は、生活背景の違いのみならず、生まれながらにして持っている身体や性格の違いも認め合うことができる子どもたちを育

てるための“よき大人像”として、子どもたちを一人の人格として大事にし、インクルーシブ教育をも上手に進めているとも言える。

このクラスの担任のC先生も、互いが安心できる安全な居場所を子どもたちに提供すべく、日々、集団づくりに取り組んでいる。クラスの子を大事にし、家庭訪問を丁寧に行う中で保護者とつながっているC先生の学級づくりがある上で、B先生の社会科の授業が深まっているのである。

B先生もC先生も子どもたちをとことん大切にして、愛情を注ぎ、丁寧に指導する。ノートを返す時にも、子どもとの心温まるやりとりがあると聞いている。

ここで、これまでの教育が大切にしてきた集団づくりを簡単にまとめると、以下のようになる。

1. 先生が子どもとつながる

子どもと寄り添い、向き合う中で、目の前の子どもを心から大事に思う気持ちを伝える。そこに信頼関係が生まれる。また、先生が子どものありのままの姿を受容し、子どもの“よき大人像”として、子どもの成長を促していく。

2. 子どもと子どもをつなぐ

子どもたちが互いのいいところを認め合い、互いの違いも認め合える関係をつくる。「班ノート」や「語り合い」、子ども同士の活動など様々な方法で取り組み、子ども同士の心をつなぎ、全ての子どもたちにとって学校・学級が居心地のいい場所となるような集団をつくり、最終的には一人ひとりの自立をめざす。

3. 先生が保護者とつながる

保護者の思いを受け止め、保護者との信頼関係を築くことにより、一人ひとりの子どもの課題に保護者と共に向き合っていく。

これらは、多くの学校で取り組まれていることであり、どこの学校でも大切にしてきたことである。

最近、「学級づくりはどのようにすればうまくいく？」という質問をよく受ける。答えは、上記の3つを実行すればよいということ。ただ、その前に必要なのは、「この子が大事！この子たちをなんとかしたい！」という熱い思いと、子どもの背景を知り、子どもの躓きやしんどさを掴み、それに寄り添い、温かい眼差しで向き合いながら、「つながり」をつくっていく姿である。その姿に、子どもは、大人を信頼し、そこに“よき大人像”を感じながら大人へと自立していくのである。

クラス全員が参加している社会科の時間が、B先生とみんなの笑顔で進められていく。外は肌寒い日であったが、教室には陽だまりのようなやさしくあったかい空気が流れていた。互いの違いをありのまま受け止め、認め合い、心を温め合いながら共に学び合う子どもたちとB先生の姿に、河内長野の教育の明るい未来が見えた。

(文責：教育指導課長 坂本 由美)